

【寄り添う力】

【緩和医療について】

「ホスピス」や「ターミナルケア」、または「緩和ケア」という言葉ですが、近年マスメディアなどで広く語られていきますので、多少なりとも耳にしたことがあると思います。ところでこの「ホスピス」や「ケア」とは何ぞや？と問われると「はて？」と仰る方もおられると思います。

●「ホスピス」は緩和ケア病棟や施設（在宅も含む）。

●「ターミナルケア」とは終末期医療。

●「緩和ケア」とはターミナルケアの手法の一つ。

聞き慣れない横文字ばかりでややこしいですが、簡単に言うと右記のようになるでしょうか。

そして「ターミナルケア」や「緩和ケア」の対象者となるのが、末期ガンなど、治療困難な患者さんや、そのご家族に当たります。

超高齢化社会を迎えつつある私達にとって、看過できない大きなテーマの一つです。と言うのも、高齢化になればなるほど、ガンが発症する

確率は高まるからです。ちなみに現在、富山県内には緩和ケア病棟のある施設は四つあります。（※『富山市民病院・市立砺波総合病院・富山県立中央病院・高岡市民病院』その他、『黒部市民病院』も開設に向けて奔走されています。今後ますます増えていくものと思います。

【日本人の死因で最も多いガン】

医療技術が進化し、一昔のように「ガン＝死」という時代では無くなりましたが、それでも三人に一人がガンで亡くなっている現実があります。

ガンという病気は珍しい病気では無くなりました。ガン患者さんは、ガン自体の症状の他に、痛み、倦怠感などの様々な身体的な症状や、落ち込み、悲しみなどの精神的な苦痛を経験します。「緩和ケア」は、ガンと診断された時から行う、身体的・精神的な苦痛を和らげる為のケアを指します。

つまり「緩和ケア」とは、末期ガンなど治療困難な患者さんと、ご家族の苦痛や死の恐怖を和らげ、尊厳を保ちながら最期を迎えて頂くための看護ケア（気配り・お世話）という事になります。そこで、身体・精神両面の苦悩

に寄り添い援助させて頂く『臨床師』という立場の存在が求められています。

【臨床仏教師】

私事ですが、昨年から『臨床師』の資格を取得するために東京まで研修に通っています。身体的な治療は病院のお医者さんの専門であるのに対し、精神的な治療は宗教者の分野です。宗教者と医療従事者がチームを組んで患者さんのケアに臨む体制が整いつつあります。そもそも仏教寺院は、宗教の場であり、教育の場であり、医療・福祉の場であり、そして文化の発信地でした。その寺院の機能が近代に入り解体され、最後に残ったのは葬式と法事でした。

かつては、宗教活動と社会活動が渾然一体となり、日本仏教の中で展開されてきました。それが江戸時代までずっと続いてきました。ところが明治維新以来、神仏分離政策や、いわゆる肉食妻帯令など様々な要因が重なり、仏教やお寺の機能が解体されてきた歴史があります。しかし今、歴史に埋もれてしまったままの仏教（宗教）の覚醒が叫ばれています。

異常な事件事故が多発する現代社会には『ひきこもり・自死・ホームレス・家庭内暴力・いじめ・病魔・借金・

育児放棄』などの苦悩が山積しています。そんな混乱する社会に、宗教の参入が急務です。その一つが『臨床仏教師』という存在です。

【仏教とは「仏の教え」】

ここで一旦原点に戻り、仏教というものについてご説明します。

仏教を一言で言えば『慈悲（慈しみ憐れむこと）』と『智慧（物事をありのままに把握し、真理を見極める認識力）』の教えです。つまり仏教とは、この『慈悲』と『智慧』の教えを根幹に帯びて、人生という修行場で悟りの境地に達する事を目指す教え、という事になります。この悟りの境地に達した存在を「ブツダ（仏陀）」と呼びます。仏陀たるお釈迦様が、仏陀になるための方法を説いたという事で『仏教』と呼ばれています。

【ありのままに無常を生きる】

仏教をお説きになられたお釈迦様は『生老病死（しょうろうびょうし）』という人生の『無常（物事は刻々と変わっていく）』を悟られました。読んで字の如く「誕生して、年老いて、病気にもなり、最後は死を迎える」のが人生というものです。この「生・老・病・死」を仏教では『四苦（しく）

と言います。『苦』は「おもいのままにならない・どうしようもない」という意味です。人生は人の意志を越えています。この世に生を受けた以上、老いたくなくても老いますし、病みたくなくても病気になるし、死にたくなくても必ず死はやってきます。私達は、この現実には真正面から向き合い、力強く生きるしかありません。日蓮聖人も『妙法尼御前御返事』の中で、「**まず臨終のことを習うて後に他事を習うべし**」と仰っています。肉体を持った自分の命は永遠ではなく、いずれ必ず尽きる命だという事をしっかりと自覚する事によつて、今ある命の尊さを理解することが出来る事をご教示下さっています。

逆に「死」という現実を見つめる事が無ければ、今あるこの命を輝かせることなど出来ませんでしょうか？私には「ノー」だと思います。いずれ路頭に迷うのではないかと思えます。

『方丈記』には「いく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず」とあります。物事は思うようにならないし、常に移り変わっています。これは厳然たる現実であり、しかも人の力でどうにかなるもので

はありません。私達は、大きな存在（神仏）に「生かされている」という稀有な事実を自覚し、その上で現実を生きる存在なのであります。

万事、物事がうまくいっている様に見えても、たまたま諸事情の絡み合いでうまくいっているに過ぎない事がほとんどです。事情の一つが変わるだけで物事は大きく、刻々と姿を変えるのです。そんなつかみ所の無い諸行無常という真理が働いている現実の世界を、正しく見極められるように、そして正しく生きられる方法を説いたのが『仏教』という教えです。

ここでもう一つ『グリーフケア（悲嘆）』というケアもあります。遺された遺族の、死別の悲しみに寄り添う事です。また、このケアは死別の有無にかかわらず、今、この瞬間に悲しんでいる人の悲しみに寄り添うのです。肯定でも否定でもなく、ありのままに現実を受け止められる自分になるために、やはり、私達には宗教（仏教）が必要なのだと思えます。

【因（原因）・果（結果）】

最後に、仏教では「因（原因）・果（結果）の法則」も説かれています。私達は「因果」という、いわば宇宙の真理

の中で生きています。

巻頭ページ（住職欄）では、花子さんの物語が紹介されてきました。彼女は幼少期に生死をさまよう闘病生活を余儀なくされました。その体験（原因）

があったからこそ、現在は「東京仏教ホスピス会」の会員として、多くの方々の中に寄り添っておられる事でしよう（結果）。彼女の幼少時の闘病生活の体験があつたればこそ、現在の姿があるのは間違いないと思います。偶然ではなく、おそらく必然の流れだと思えます。また、彼女は日蓮宗寺院の娘さんとして生を受け、乳児の頃からお題目に触れる生活をされておられました。

彼女は成長するにしたがつて、自らもお題目（南無妙法蓮華経）を唱え、自然と信仰の道に入る素養が培われたのだらうと思えます。そして迎えた小学校三年生時の闘病生活。その時お父さん（住職）から教えてもらった「三つの風船」の話。信仰の素養が培われていた為、素直に心が響き、神仏に手を合わせ、お題目を唱え、奇跡的に病が完治するに至ったものと思えます。そして彼女は現在、尼僧（女性の僧侶）さんとして、ご活躍なされておられるそうです。

心に寄り添う事で、相手の人生を大きく好転させる事があります。

そして、その根幹には、信仰という精神的軸を培っておくことの重要性も感じます。

生者、死者の別を問わず、共に喜び、共に悲しむ、そんな魂の交流が出来る共生の場がお寺です。

五月二十五日は真成寺の祠堂（しどう）法要です。仏教（法華経）を通して、ご先祖様にご報告しにお願い下さい。そして今ある自分の魂の洗濯をしに、どうぞお出かけ下さい。

合掌 副住職 谷川寛敬

ラニ・フラ・ホア



環水公園

ハワイアンフェスティバル開催されます。ラニフラホアの出演日時は次の通りです。

- ・五月二十四日（土）
- ・十時五十分〜十一時十分